

「だがしや楽校」の講座で学ぶことは？

松田道雄

平成 22 年 6 月 7 日

メール：[mmatsuda@takachiho.ac.jp](mailto:mmatsuda@takachiho.ac.jp)

ブログ：夢の種まき楽校

\* 「だがしや楽校」のHPでも共同ブログができます。問い合わせでご投稿ください。

\* 脳細胞の運動には、大学生が管理している「いどばた大学」HPにご参加ください。

## 概要

「だがしや楽校」は、自分と社会のあり様を現実の場でつくり出してみる最も手軽な最小の集いとして考えました。主題は、私と社会（世界）です。

A面 自分を見せる（自分から社会へ） → ← B面 社会をつくる（社会から自分へ）  
《溶解と創造》

### A面 自分を見せる

活動1 まち歩きをして、自分を見せている場面を探す。日常生活が「教科書」。記録を分かち合う。

活動2 自分を語る。自分の背景（経緯と考え）をことばと文字で見せる。

活動3 自分みせの屋台をつくって集う。（だがしや楽校）

自分みせからの広がり

パターン1 見せ → 縁育て → ソーシャルスキル（私）、コミュニティづくり（地域）

パターン2 見せ → 定期市 → 常設の店（コミュニティビジネス、社会起業）

パターン3 見せ → 体験講座 → 講師、教室（カルチャービジネス、社会起業）

### B面 社会をつくる

活動1 まちの地図をつくる。自分なりに見える社会の姿を描いて印刷して配布する。

活動2 社会を語る。どんな社会でありたいか、社会観・社会像を語り合う。

活動3 異なる多様な人たちをいざなう。原社会体験をする。（だがしや楽校）

---

最初に、「だがしや楽校」を初めに試みた時の思いを今ふりかえってみて提案します。この講座でいっしょに学びながら、みなさんなりに考えてください。自分はこう考える、自分ならこうしたい、…と。

「だがしや楽校」は、自分と社会のあり様を現実の場でつくり出してみる最も手軽な最小の集いとして考えました。主題は、私と社会（世界）です。私と社会のあり方をつくってみる哲学的な遊びとも表現できるかもしれません。

私は社会にどのように関わったらいいのか？ 社会とはどのようなものなのか？

どのようなものであったらいいのか？ その中に私はどのようにしているのか？

それを考える具体的なアイデアのモデルとして、駄菓子屋を発見しました。それは、おばあちゃんが

子ども相手にしていた小さな商いの店です。しかも、自分自身も子どもの頃に通った経験があります。

ここから自分を語ります。それは、だがしや楽校を考えた私のそれまでの背景（経験と考えなど）をみなさんに見せることになります。

私が駄菓子屋を訪ねながら、駄菓子屋を入口にしてさまざまな分野の本を読み、自分と社会の関係を考える具体的な姿として私が最初に試みた「だがしや楽校」は約2年くらいでしょうか。その後、私自身が実際にしてみるのはやめて、その思いと考えをすべて本にまとめました。1000頁分書きましたが、精選されて600頁の形になった『駄菓子屋楽校—小さな店の大きな話・子どもがひらく未来学』（2002、新評論）です。それは、駄菓子屋を入口に、自分と社会のあり方と未来を想像してみた文明社会論と学び方論の提案でした。

駄菓子屋の起源、駄菓子屋の調査、フィールドワークの方法、地域社会の姿と変容、駄菓子屋世界の価値、まちづくり、人生のライフデザインなどを、人類史の視野から、学校教育との対比、ゲーム・ケータイ・コンビニなどの近代社会・デジタル化との対比、子どもと高齢者との対比など、さまざまな軸を組み合わせて多面的な世界像を提起しました。その思考の塊が「駄菓子屋楽校」であり、その具体化の実践の試みが「だがしや楽校」でした。

駄菓子屋に着目した研究と「だがしや楽校」を生み出した背景には、私のそれまでの活動の経緯があります。

大学生時代、哲学思想・科学・芸術デザイン・文化論などさまざまな分野の本を読んで総合的な思考を身につけたこと。新聞のスクラップを分類整理したりなどじっくりと学び方の試行錯誤をしたこと。仲間と地域文化づくりの活動をしたこと。デザイン企画を企てたこと。その後、中学校の教員になって学校教育の研究をしたこと。地域を歩き、郷土史文献を読み、地図を描き、構想を練って地域づくりの活動をしたこと。壁画とニットデザインという異なる領域を組み合わせるプロジェクトをおこしたこと。お寺での大人が集う寺子屋をしたこと。公民館で学校外教室を開いたこと。フリーマーケットをしたこと。総合的な人間文化論を自主レポートでまとめ続けたこと、などです。

「駄菓子屋楽校」と「だがしや楽校」には、それらの要素がみな含まれており、その延長上に具現化した途中の産物です。各地で『駄菓子屋楽校』を読んでくださった方々が、何か自分の生活や人生の中で活動や姿形として生み出してくれるものがあったら、それはみなさんそれぞれの「駄菓子屋楽校的活動」なのだと私は思っています。

「だがしや楽校」の実践については、宮城県の青年会議所の方々が中心に展開した「だがしや楽校」をもとに、絵本とらくがきスケッチ帳を組み合わせた絵本ノート『だがしや楽校のススメ』（共著、2003、創童舎）を第一弾として形にしました。その後、地元のシンガーソングライターがつくった歌と教育関係者の対談をも入れたCD『だがしや楽校のススメ』（共編、2004、テイチク）も作品化されました。

私が思考の具現化として試みた「だがしや楽校」は、文字に具現化するために取り組んだ『駄菓子屋楽校』にまとめましたが、初版本が完売になった時に、そのまま増刷をするのではなく、大胆に、地域社会の変容論やまちづくりなどの未来論などをばっさり削除して、核心部分を残しつつ大人が読み合う輪読会という形式を提案しながら新版『輪読会版・駄菓子屋楽校』（2008、新評論）としてまとめました。

その意図には、初版の『駄菓子屋楽校』から削除した部分を、今度は関心ある方々といっしょに考え

合ってつくり出していきたいという願いがありました。『輪読会版・駄菓子屋楽校』を出した時点で、大人が学び合う講座を構想したのです。同時に、『駄菓子屋楽校』から削除した学び方の部分と、『駄菓子屋楽校』の着想の背景にある考え方と、「だがしや楽校」の活動原理などについて、人間活動論という領域を提起して、関係性という切り口から大学生などの若者が自分の人生を生きるために学ぶことができるテキスト『関係性はもう一つの世界をつくり出す』（2009、新評論）としてまとめました。

こうして、私にとっては、本と活動と作品化、個人と共同、個人の活動と行政の事業など、さまざまな支軸によりながら変容発展してきているのが、「駄菓子屋楽校」と「だがしや楽校」だと思っています。そして、「だがしや楽校」の大人の講座として初めて行なわれた、昨年度のすぎなみ大人塾昼コースでの「だがしや楽校を開こう」の実践は、地元の出版社から『縁育ての楽校』（共編、2010、日本地域社会研究所）として6月末に出版されます。この本では、受講者自身も「文字」に参画して考えを綴り、「だがしや楽校」はコミュニティづくりの始めとしての「縁育て」の方法論として提起しています。

今後、さらに、いろいろな人との出会いによって、新たな「駄菓子屋楽校」と「だがしや楽校」の思想と活動が生まれ、変容し続けて、個人と社会のあり方を問い続けていく窓口の一つになっていければいいと願っています。

実際に、これまでも自分と社会をつなぐ「共世界」をつくり出す「だがしや楽校」の変容は、いろいろな場面で試みました。山形のコミュニティラジオで、そこに住んでいる人、一人一人から生き方を聞き出す、「ラジオ版だがしや楽校」でもある「天分楽校」。東北芸術工科大学子ども芸術教育研究センターでの研究実践で試みた「アートカフェ」「午後の教室」「地球の庭づくり」など。山形県の月山のふもとのおばあちゃんたちが山菜・きのこ料理などを実演して見せて出していっしょに食べ合う「生き生き食堂」。



そして、現在、高千穂大学での授業で行なっている屋上菜園観察活動も、どこやら駄菓子屋的雰囲気があります（現在は、カボチャ、トウモロコシ、スイカ、ジャガイモなどが育っています）。「駄菓子屋楽校」と「だがしや楽校」の様相は、どこでもつくり出すことができます。

私自身の現在の関心は、大人の学習の年間講座のプログラム開発と、相互交流による地域活性化、大学生や若者の学習に求められる内容と方法、そしてさまざまな着想です。それらの切り口に「駄菓子屋楽校」と「だがしや楽校」があります。

『駄菓子屋楽校』の中で一貫して述べたことは、次のことです。この本は、子ども向けではなく、大学生以上の大人向けの本ですので、私も含めた大人の心の持ち方と思考法についての提案です。

大人になると、とかく大人の組織社会の中で生きるために必要な論理的・計画的・見通しある思考になります。さらに、私たちはだれもが同時代の思考性の中に制約されて生きていますので、現代の私たちは、合理性やマニュアル思考や貨幣交換原理などの現代社会の枠組みをつくっている考えが誰の頭にも浸透しています。

それらをほぐしながら、自分の新たな変容や未来づくりのために、

駄菓子屋の周辺で遊びまわった子どもの遊び心にかえて自由な試行錯誤をする。

駄菓子屋のおばあさんのような無理のない安らぎなどをも与える自営の営みを見習う。

こうして、私が語るができる「だがしや楽校」の経緯を前置きにした後に、「だがしや楽校」で学ぶ大きなことから「自分」と「社会」の内容について、少し具体的に提案したいと思います。

みなさんも、みなさんとここで出会って「だがしや楽校」をするまでの人生の背景を、のちにお聞かせください。

## A面 自分を見せる

私たちは誰か他者に関わることによって成長し、私たちはお互いに社会の中で生きていることとなります。そのためには、まず私は、自分の殻に閉じこまらずに常に社会に開いていなければなりません。自分の存在そのものを誰かに見せる。そこから、誰かとの関わりが生まれます。

まち歩きして、私たちの日常生活の中で、「自分を見せる」場面を探してみましょう。私はこんな場面に会いました。

### 場面1 外に出る

上野公園近くの通りに木造のなつかしい家があります。植木の緑が玄関の周りを囲んでいます。天気の良い日に、その前にベンチが置かれて、その家のおじいさんが日向ぼっこをしています。そこを通る私も、あいさつするようになりました。おじいさんが家の中にいれば、私とおじいさんが関わることはありませんでしたが、おじいさんが家の外のベンチにすわって自分を見せてくれたことで会うことができます。そして、おじいさんが私たち通行人に向かってすわっていたので、そこを通る人も目と目を合わせることができ、そこからあいさつと対話が生まれました。



### 場面2 自分の芸を見せる

上野公園では、都が認定している大道芸人（ヘブンアーティスト）の人たちが芸を披露してくれています。自分に何か特技や芸がある人は、その技を人に見せることで人を楽しませてくれます。それでお金を得ることができれば芸で生活することにもなります。



自分の特技や芸を見せる。これも自分を見せる方法です。ただ、この場面では、1対多の関係なので、私たちはその人の芸を見るだけで、その人との直接のやりとりはできませんでしたが、コンサートホールのような専用の場だけでなく、街中の空間でも「小さな劇場」の場が、個人が何かを見せることで生成することを示してくれています。



まち中で芸を見せてくれる場面にも会いました。谷中で、古いせんべい屋さんの建物をスケッチしている方に出会いました。話かけたら、ご自身が描いた建物のスケッチの絵はがきをいただきました。向かいのせんべい屋さんののぞくと、せんべいを焼いている様子も通りから見るができます。かつては、畳屋さんや豆腐屋さんなど、ものをつくる技を見せてくれている個人の店はたくさんありましたね。



### 場面3 自分のモノを見せる

上野公園から千代田線方面に歩く谷中・根津・千駄木（谷根千）は、平日から散策者が多い地域です。日曜日には、路地などで個人が自分のモノを並べて見せている光景を見かけます。「へび道」の路地でモノを見せている人がいました。現在は、フリーマーケットと呼ばれていますが、それは中世の「見世（店）」の原風景を見ることができます。それは、だれもが社会の歴史の発展段階を自分でも行なってみることができ



きるということでもあります。モノを並べて見せて売る仕事をすれば、その商いは仕事になります。上野公園に、モノを工夫して並べている物売りの屋台があります。店を構えないで売る場合には、見せ方の工夫も求められます。縁日お祭りの屋台でよく見かけましたねえ。

### 場面4 見せて歩く



谷中の休日の路地に、どこからともなく現れて自転車で手づくりの帆布のバッグを売っておねえさんがいます。「えいえもん」さんです（HPあり）。物売りはさまざまな工夫をする実践知がありました。三谷一馬著の江戸時代のさまざまな物売りの絵は、アイデアのヒントです。『色彩江戸物売図絵』（中公文庫、1996）。



### 場面5 見せてやりとりする



上野桜木の路地で年2回、「我家我家市（がやがやいち）」というフリーマーケットが開かれています。その路地は、その住民の方が手をかけて草花を植えている路地で、いつもいろんな花が咲いています。どこの路地にも、植木などが置かれています。でも、塀で囲って自分だけが見る植木ではなく、通りの人にも見せる植木と花になっているように思います。そこでのフリーマーケット。モノを並べれば、売り買いによって人と人のやりとりが生まれます。一般に、売るモノはお金と交換するだけのやりとりですが、かつての個人商店

（今でもありますが）では、現在のコンビニやスーパーと違って、単なる商品とお金の交換の場ではなく、話のやりとりを通じた気遣いやお世話など、共同生活の互助が営まれていたと思います。

## 場面6 見せて体験してもらう



見せることは、それとともに体験してもらう活動に広がります。上野公園で開かれた市民のイベント「コドモワカモノ HAPPY FESTA」(主催 NPO コドモ・ワカモノまち ing、2010年3月13日)で出会った体験屋台の数々です。大妻女子大の学生さんたちが、アロマキャンドルづくりを子どもたちに体験してもらう屋台を出していました。参加者に体験してもらう参加体験の工夫はたくさんあります。

新潟のわら細工のおじいさんがわら細工を作るところを実演して見せて、作ったわらのかぶりもの「ゆきんこ」を子どもたちがかぶってみる体験もしていました。そうして考えれば、世の中のあらゆる技術・文化は、こんな風にして、見せて体験して学ぶということが可能なのかもしれないね。



上野公園では別の日に新潟県の物産市をしていて、そこでも手毬づくりなどの体験屋台がありました。

## 場面7 見せる方法を工夫する

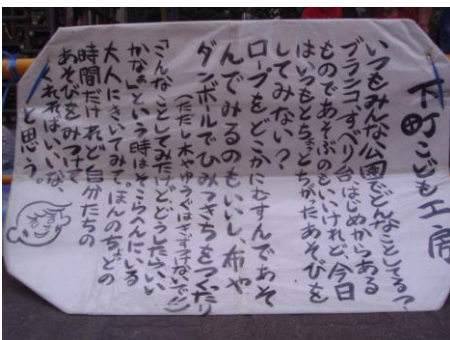


上野公園は花見の名所です。宴会前の場所を見ると、段ボールで工夫してテーブルをつくっているのを見かけます。リサイクルで身近な素材を使って、手軽に自分を見せる屋台などをつくることを試行錯誤することも、実用性の高い学習になります。いろいろな工夫のヒントをまちの中などからも見つけてみましょう。

見せる方法は、まち中のいたるところで見つけることができます。店がしまっている、その店の中のことを紹介した看板などはたくさんあります。それらの中で、より個人の創意工夫があるものは？ みなさん自身のセンスに共感するものは？ そんな見方で探してみてください。これは、北千住の宿場町通りの路地で見つけました。



## 場面8 見せ合う場をつくる



初夏のような陽気の日曜日、上野桜木の公園に、たくさんの家族連れが集い、子どもたちが遊び戯れていました。児童館主催で毎年行なっているという「下町こども工房」でした(2010年6月6日)。近所のおじさんや芸大美術学部の学生さんなどもボランティア



アコで手伝い、アコーディオンのBGMもありながら、お絵かき、どろ団子づくり、水遊び、砂遊び、ロープ遊びなど、大人も混じ

っていろんな遊びが混とんで行なわれていました。このような複数の活動が集まってお互いの活動や技を見せ合い、協力し合うことができる集合的な場づくりもあつたら楽しいものですね。それは、いろいろな大人が協力して行なうことによって、日常にはなかなか見られないような「見せ合う」関係性が凝縮した場になります。

こうして、まち歩きしてみると、まちの中からたくさんのことを発見することができると思います。「だがしや楽校」の学習の原点は、私たちの日常生活からの学びとその背景の人類史の探究です。では、まちのどんなところに着目すればいいのでしょうか？ もうみなさんもお察しのことと思います。

私たちが住んでいるまちを歩いてみると、まちの構成要素は、大きく次のようなもので成り立っているのではないのでしょうか。

自然      公共空間      企業      個人商店      自宅

これらの中で、私たち個人が自由にできて、他者に開いたところが個人商店です。自分を見せるヒントは、大きな企業のビルよりも個人の創意工夫が見られるところを探してみるのが手がかりになると思われれます。また、自宅の前の公共の道路に面したところに植木やベンチを置いたり、「私」と「公」のすきまや公共の場に、人と人の縁が育つ「共」の空間ができるような場面にも着目することができます。

大学生などが就職をめざすのは、一般に、企業や役所などの組織体の一員になることですが、それとともに、社会の中で私という存在が生きていくための関係を考えていくには、社会の組織体の一員以前に、私個人が他者や社会とどう関わるができるのか、という「自分みせ」活動こそが、根源的な社会活動なのではないかと思えます。「自分みせ」活動は、「駄菓子屋的活動」と呼んでもいいでしょう。

若者たちには、就活の前に、**D活**（駄菓子屋的活動）もしてみようと提案しています。

## B面 社会をつくる

これまで、「だがしや楽校」について1回だけの話しかする機会がなかったので語らなかつたことがあります。「だがしや楽校」を学ぶこの通年講座で初めて論じたいと思います。それは、「自分を見せる」ことをてんびんの一方の重りとすれば、もう一方の重りとなる「社会をつくる」ということです。

「自分を見せる」ことをどんどん追求していくと、まわりのことが見えずに自分のことしか考えない我が強い利己主義に陥る危険もあります。みな自分が自分を見せることしか考えない集まりであつたら、どうでしょうか？

そのような利己的な社会に生きたいという人はいないでしょう。お互いに自分を見せようという「だがしや楽校」を開くときに、いつも心に思っていたことがあります。それは、その場にくる子どもや大人の人たちの立場に立ってみれば、できるだけ異なる多様な「自分みせ」の屋台があつたらいいだろうと思つたことです。

同じことをする単一の「自分みせ」の屋台なら、その内容の体験活動、またはフリーマーケットと呼ばばいいことです。「だがしや楽校」の「だがしや楽校」たる特徴は、駄菓子屋世界にあつたような多様な要素が混在しているマンダラ世界を参加者によって具現化してみようとするものでした。



私たちが生きている社会（世界）は、私と同じ考えの人ばかりいるわけではありません。あらゆる面での多様性の集合体であると言えます。

私と同じ考えの人と違う考えの人、知っている人と知らない人、日本語を話す人と外国語を話す人、商売とボランティア、文系と理系、仕事と遊び、見るものと聞くもの、ソフトとハード、芸術と科学、子どもと高齢者、男性と女性、一人と集団、手を使うことと足を使うこと、…

あらゆることがらが共生していることで社会の豊かさが成り立っています。しかし、そのような社会の全体を見ることはできないので、日常生活ではなかなかそのことを実感する機会はありません。なぜなら、日常世界では、その複雑で大きな社会のごく一部分の中を生きているからです。

私たちは、それまで知らなかった人や考えやモノに出会うことで私自身も成長します。「だがしや楽校」は、「自分を見せる」ことを探究するとともに、それまで自分も知らなかった誰かを誘い、その場にいざなおうとする働きかけもみんなが常に心がけることで、その場は、日常生活では実感することができないような、社会の原形的な場になります。「原社会」と呼んでもいいと思います。

そして、自分たちがつくったこの「原社会」の中で、異者の存在に気づき、自分にはないものへの畏敬の念を持ち、社会の多様性を思い、その中に自分も溶け込みながら、その社会から養分を吸収して自分も新たに成長していく。そんな自分と社会のあり方、自分をつくる社会、社会をつくる自分を、目の前に具現化してみる試みこそ、「だがしや楽校」なのだと、私は心の中で思っていました。

自分が知らないことを見つけて、その場に誘うこと。なかなかそれも大変なことかもしれません。しかし、お互いに自分のこととともに他者へのまなざしと働きかけを心がけることで、そのような場はだれにとっても自分にとっても、毎回、自分がこれまで思っていたようにはならない「生きている社会」になるのではないかと思います。

私は、このような多様な社会の「原社会」の根源を三人の集まりに見ました。三者関係には、何通りの様相があると思いますか？ 三者関係のトレーニングこそ社会生活の基本であると考え、これを**三角学習**として提案しています（『関係性はもう一つの世界をつくり出す』新評論）。

「だがしや楽校」では、いたるところで**三角学習**を体験することができます。

自分と社会を、それを目的とせずに体験を通して知らずに学んでいく。そんな集いの場として、最初に始めてみたのでした。

これからみなさんとともに、「だがしや楽校」を通して、いろいろなことを考え学び、いっしょにこれからの人生と社会を考え、何かまた新たなことをしていきたいものだと思います。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

小さな余白・メモ空間 .....